

F/T13
FESTIVAL/TOKYO

ARTS
COUNCIL
TOKYO



東京文化発信
プロジェクト



TOKYO ● 2020

東海道四谷怪談 一通し上演 / 木ノ下歌舞伎

監修・補綴：木ノ下裕一 演出：杉原邦生

作：鶴屋南北

Tokaido Yotsuya Kaidan / Kinoshita-Kabuki

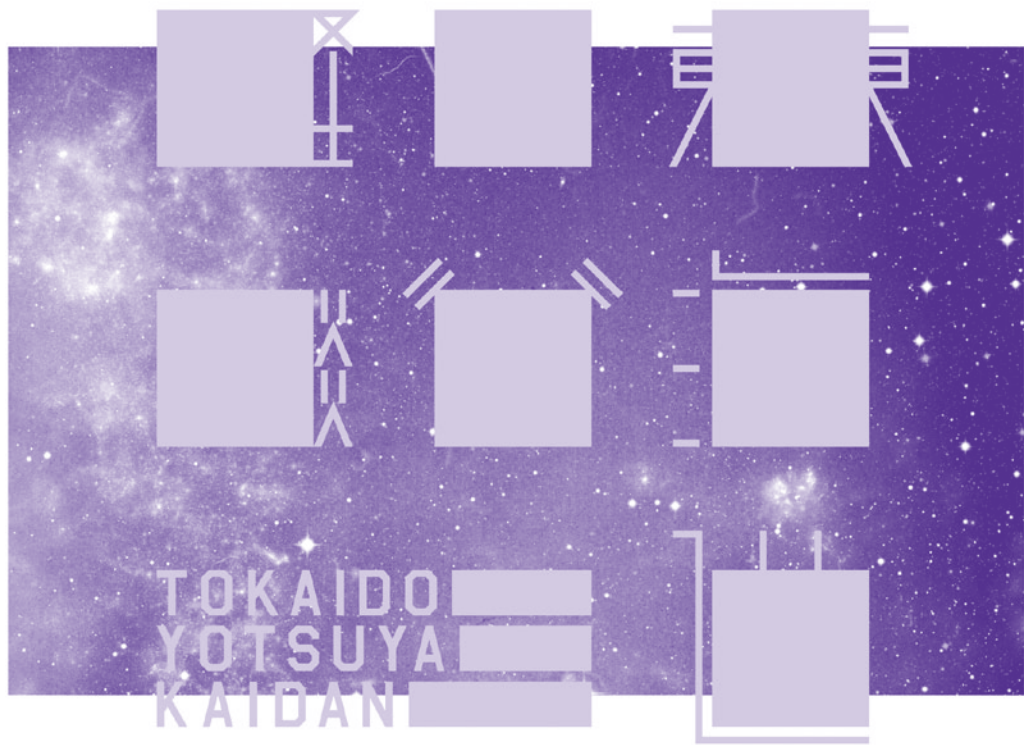
Supervision, Revisions: Yuichi Kinoshita Direction: Kunio Sugihara

Text: Nanboku Tsuruya

11.21 (Thu) - 24 (Sun)

あうるすぽっと

Owlspot Theater



現代演劇に「古典」を奪還する

八角聡仁（批評家、近畿大学教授）

日本の舞台芸術は真の意味での「古典」を有しているだろうか。言うまでもなく、古典とはそれを潜り抜けるもの自身を照射し、変容させることを通して、そこから絶えず未知なる可能性を汲み出していくことのできるような作品を指す。逆説的ながら、それは繰り返し（再）創造されることによってしか成立しない。

歌舞伎が歴史的に蓄積してきた演劇的な知と技法は、おそらく一般に「伝統」という言葉からイメージされるよりも、はるかに豊かなポテンシャルを秘めている。坪内逍遙がまさしく「キマイラ」に擬したように、江戸時代の社会や文化や芸能をさまざまな位相から貪欲に取り込んだ多面性、異種混淆性のかこそが歌舞伎の本領であり、それは今日のような社会の変動期、混乱期においてももっとも発揮されるべきものはずである。近代以降、一企業による事実上の占有という特殊な興行形態のもとで（その中でも重要な試行はあったとはいえ）次第に演出が固定化し、俳優中心主義という以上に一種の「スター・システム」に偏りすぎた歌舞伎の上演を、現代演劇やコンテンポラリーダンスと同じ地平で捉えなおそうとする木ノ下歌舞伎の試みは、単に伝統演劇の現代化という文脈にとどまらない大きな射程を持つ。

周知のように、鶴屋南北の作品は1960年代以降、新劇が否定してきた伝統演劇の再評価とともに、日本の「近代化」の根底的な問い直しを図ろうとする演劇人たちにとって、きわめて特権的な再読解の対象となってきた。「小劇場演劇（アングラ）」

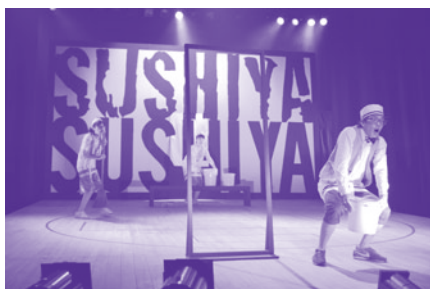
の主要な演出家たち（鈴木忠志、蜷川幸雄、太田省吾など）がいずれもその活動の初期に南北のテキストと向き合っていることも改めて想起されている。『東海道四谷怪談』からいわゆる「鬘梳き」の場を取り上げた旗揚げ公演『yotsuya-kaidan』（杉原邦生演出、2006年初演）で、木ノ下歌舞伎もその系譜に連なることになる。アトリエ劇研（京都）やこまばアゴラ劇場の小さな空間を最大限に活かした演出は、歌舞伎のセノグラフィーにオルタナティブな視角を開くとともに、社会の下層を生きる人々を貫く権力のメカニズム、現代にも通じる排除と抑圧のシステムとそれへの抵抗を、重層的に描き出してみせた。

第二回公演としてほぼ同じ台本に基づく『四・谷・怪・談』（木ノ下裕一演出、2006年）を上演した企図も明快である。一つのテキストから現行の歌舞伎では見えてこない複数の演出の可能性を示し、それも恣意的な改変や解釈を加えるのではなく、戯曲を丹念に、また批評的に読み込むことを通して、そこに内在する演技や空間のレベルにまで再検討を施すという木ノ下歌舞伎の方法論は、すでにここで確立されたと言っている。演出家や俳優を固定せず、さまざまな才能とのコラボレーションを通して多様なアプローチを模索する（それも木ノ下の「監修・補綴」が可能にしていることだが）という小さな集団としては稀有な方針も、当然そこに基づいている。

きわめて真っ当ともいえるその方法論がまぎれもなく有効であることを証明してみせたのが、続く『テラコヤ』（杉原邦生演出、2007年）である。『四



舞踊公演『三番叟/娘道成寺』より「三番叟」
© Ryuichiro Suzuki



京都×横浜プロジェクト2012『義経千本桜』より「鮓屋」の場面
© Toshihiro Shimizu

谷怪談』であればそこに社会秩序に対する告発の主題やバロック的な構造の新しさを見て取ることもある意味でたやすいし、だからこそ現在でも繰り返し上演され、さまざまな映画化も行われてきた。だが、上演頻度の高い人気演目とはいえ、もっとも封建的な制度に根ざしているかに見える「寺子屋」に、かつて誰が現代的な主題を探りあてたであろうか。

木ノ下歌舞伎による、いわばブレヒトの読解を経た「テラコヤ」は、すがわらでんじゆてならいかのみ『菅原伝授手習鑑』全編の底流にある「鎮魂」のテーマを前景化する。そして、登場人物たちを突き動かしているのが、単なる「宮仕え」の悲哀や忠義の桎梏ではなく、国家と「弔い」をめぐるポリティクスであることを鮮やかに浮かび上がらせた。それが今もアクチュアルな主題であることは、「靖国問題」を引き合いに出すまでもないだろう。すでに述べてきたように、古典的レパートリーの読み直しは、様式の美学から歌舞伎を解き放ち、それを本質的な意味で政治化することでもある。

歌舞伎の現代化に際して、おそらくもっとも大きな問題となるのは俳優の演技という側面にちがいない。生まれた時から特殊な訓練を受けてきた俳優に依存せず、「歌舞伎を演じる」ことを神聖化された「芸」の領域から解放するにはどうすれば良いか。中途半端に歌舞伎の型や技法を取り入れるという発想では「真似事」にしかならないことは自明だろう。それに関しても木ノ下歌舞伎の姿勢には

いたずらな気負いは見られない。観客とともに現在を生きている俳優やダンサーの身体が自ずから抱え込んでいる同時代の現実を、歌舞伎の〈世界〉を通して照射することで、そこに「名人芸」とは別種の緊張が生じうることを、木ノ下歌舞伎の舞台ではしばしば目にしてきた。『三番叟』(杉原邦生演出)や『娘道成寺』(きたまり演出・振付・出演)はその代表的な成果だろう。特に後者は、歌舞伎舞踊のきわめつけの難曲をそのエッセンスを活かしつつ、ダンサー自身の身体を通して現代的なソロダンスへと昇華した見事な再創造だった。

その後の「菅専助三部作」(せつしゆうがつほうがつじ「撰州合邦辻」)かつらがわれんりのしからみ だてむすめこいのひがのこ『桂川連理柵』『伊達娘恋緋鹿子』)や『俊寛』(木ノ下裕一演出)、そしてとりわけアメリカ人俳優を弁慶にキャスティングした『勳進帳』(杉原邦生演出)に見られるように、歌舞伎がその根本に保有しているメロドラマ的想像力(それは新劇が歌舞伎を排撃している間も映画によって育まれてきた)が、文化の境界とその揺らぎをどのように描き出すかの、そしてそこにジェンダーの政治がどのように作用するのかという視点が浮上していることも注目に値する。また、『義経千本桜』(多田淳之介総合演出)では、天皇制をめぐる問題への着眼などの一方で、歌舞伎の持つ祝祭性、遊戯性にも大きく焦点を当てるなど、通し狂言ならではの趣向を存分に披露した。F/Tでの『東海道四谷怪談』の通し上演は、旗揚げ以来7年を経て一巡りした木ノ下歌舞伎の(とりあえずの)集大成となるはずである。

木ノ下歌舞伎 meets 東海道四谷怪談

木ノ下歌舞伎とは？

2006年京都にて、主宰・木ノ下裕一を中心に活動を開始。杉原邦生をはじめとする企画員と共に、古典演劇と同時代の舞台芸術がどう相乗作用しうるか、新たな古典観と方法論を探求、発信し、ムーブメントの惹起を目指している。歴史的文脈を踏まえつつ、多様な視点で歌舞伎にアプローチする方法のひとつとして、木ノ下の示す指針のもと、さまざまな演出家と共に創作活動を行っていることも特色のひとつ。2012年には、多田淳之介（東京デスロック）、白神ももこ（モモンガ・コンプレックス）、杉原による演出（リレー形式）で『義経千本桜』の通し上演を実現させている。

木ノ下歌舞伎と『東海道四谷怪談』

木ノ下歌舞伎が鶴屋南北『東海道四谷怪談』に挑むのは、（再演をのぞき）今回が3回目。2006年の『yotsuya-kaidan』（演出：杉原邦生）では、現代的な身なりをした俳優たちが、古びた定式幕の向こうから台ごと押し出され、座ったまま正面を向いて演技するさまが、ドラマを突き動かす見えない力の存在と登場人物たちの運命を鮮やかに印象づけた。続く『四・谷・怪・談』（2006年）は、主宰・木ノ下裕一の演出。活動の初期に、同じ演目を別の演出で見せることは、カンパニーのコンセプトでもある「古典の再検討」の可能性を明確に打ち出すものでもあった。上演に際し、木ノ下はこの演目を「普通に生きていたつもの人間たちが、それぞれの胸のうちに存在する一抹の〈利己心〉のために、釘の掛け違いを生じさせ、全員で悲劇に向かう一種の群像劇」と読んだという。〈悲劇のヒロイン・お岩〉と〈悲劇の元凶・お梅〉を一人の俳優が演じることは、ある時代、ある場所に共に生きる人々のドラマを、いっそう奥深いものにした。また、室内で進行するドラマを柵のような壁が囲んでおり、その向こうに外界を行き交う人々の姿がこいま見えるという趣向も、ドラマの背景にある社会を感じさせる効果を生んだ。

木ノ下が打ち出した「群衆劇」というアプローチは、今回の上演でも踏襲される。これまでの上演はどちらも、3幕目の「髪梳きの場」を扱ったものだが、滴を持しての全幕上演は、より深く、スケールの大きな世界観を、私たちの目の前に立ち上げてくれるはずだ。



『yotsuya-kaidan』演出・美術：杉原邦生



『四・谷・怪・談』演出・補綴：木ノ下裕一

お岩の鏡が意味するもの—『四谷怪談』の反転の世界

田中綾乃(演劇評論家・三重大学人文学部准教授)

『東海道四谷怪談』は、四世鶴屋南北の作品の中でも最も知られた作品であろう。初演は文政8年(1825)の江戸中村座。町人文化が栄えた文化文政のこの時代は、長らく続いた幕藩体制が崩壊の兆しを見せる時世でもあり、激動の幕末に向かって世の中が進み始めていた。

「お岩さま」で有名なこの作品は、怪談劇として馴染みがあるが、実は『仮名手本忠臣蔵』の裏物語であることはあまり知られていない。だが、初演時、『忠臣蔵』と『四谷怪談』が二日間に亘って交互に上演(*1)されたことから明らかなように、『四谷怪談』は『忠臣蔵』の世界を合わせ鏡のように裏側から映し出している。もっとも「生世話」(*2)を得意とした南北のまなざしは、武家社会には向けられていない。あくまで庶民の生活に根ざしながら、塩冶家や高家に関わる登場人物たちの欲望と挫折、そして妄執を、その当時、巷で流布していた噂話や実話を巧みに緋交ぜにしながら、怪談芝居としてダイナミックに創り上げたのである。

市井の無頼漢をはじめ幽霊や化け物など異質なものを登場させて世界と対峙する南北のまなざしは、常に〈反転〉のイメージがある。『四谷怪談』の中では、第二幕の「伊右衛門浪宅の場」において、それが集約されている。

この場は、隣家の企みから毒薬によってお岩の美しい姿が醜く変容していく様子を描写している。毒薬を飲んだ直後、お岩はまだ顔の変貌に気づいていない。言うまでもなく、顔は自らの身体に属しながら、自分では直接見るできないパーツで

ある。それ故、お岩も按摩の宅悦に指摘されるまで、己の顔の変貌を知らない。恐る恐る鏡を見たお岩は「これがわしの顔かいな」と驚き、初めて事の次第に気づく。——このお岩の台詞は実に象徴的である。と言うのも、鏡を媒介にしてしか自らの顔の変容を知ることができないという〈顔の他者性〉が現れていると共に、これを機に物語は別の次元で転換し始めるからである。

鏡と自己との関係については、20世紀の哲学者たちが盛んに論じた問題である。例えば、ラカンが自我の成立を「鏡像段階」として呈示する。この理論によれば、幼児はある時期になると鏡の中に映る自分の姿を発見して、初めて自己を諒解するという。デカルト以来、近代哲学では、〈私〉や自我の成立をデカルト的なコギトや内面の純粹意識に見出してきた。だが、ラカンにとって、自我とは鏡に映った鏡像、すなわち〈他者〉を通して成立するものなのである。

このラカンの説を受けて、メルロ・ポンティは次のように述べる。「幼児は、鏡像の習得によって、自分が自分自身にも他人にも見えるものだとすることに気づきます。内受容的自我から可視的自我への移行、つまり、ラカン氏のいわゆる「鏡の中の私」への移行は、パーソナリティの或る形態・或る状態から別な状態に移ることなのです。私はもはや、私が直接に感じていた通りのものではなく、鏡が私に提供してくれる私の像なのです」(『眼と精神』)。ここでは(私)の人格が、精神や意識の主體的な内面によってではなく、可視的で身体的な外

見によって、いともたやすく変容することを示唆している。

このことはお岩自身にも当てはまる。お岩は、面相が変わっても、それに気づくまでは、武士の娘として規範を守り、夫には父の仇討を願い、貞淑な妻の姿を見せる。しかし、鏡の中の己のおぞましい姿を見ることによって、顔だけでなく心までもが醜く変容する。さらに、その醜い顔が心に内面化されることによって、ついには人間ならざる怨霊にまでなるのである。

〈私〉とは、見るものであり、見られるものである。20世紀の西洋の哲学者たちが鏡像との関係で指摘したこの視点は、すでに19世紀の南北作品の内にも読み取ることができる。南北は、鏡に映ったお岩のグロテスクな顔に、視覚的な恐ろしさだけでなく、心理的な恐ろしさ、そして怨恨から怨霊へと変化する女の悲哀を込めたのである。それはあたかも私たち自身の精神の脆さと危うさを映すかのようである。

こうして鏡は、お岩の内面を〈反転〉させると同時に、物語の世界をも〈反転〉させる。鏡が映し出したのは、夫・伊右衛門の裏切りであり、隣家・伊藤家の企みである。夫婦間や他者間での関係の崩壊。実は『四谷怪談』にはこれ以外にも様々な人間関係の崩壊が描かれている。伊右衛門の舅殺し(親子)、直助の主人殺し(主従)、直助とお袖の近親相姦(兄妹)。これら人間関係の崩壊による悲劇は、その当時、幕藩体制や秩序が崩壊しつつあった南北の時代的直観とも呼べる。そして、幽霊お岩による復讐(仇討)は、夫への復讐と同時に、そのような価値観が崩壊する社会そのものへの復讐でもあるのだ。

さて、南北の〈反転〉のイメージは、三幕目の「隠亡堀の場」でも見ることができる。歌舞伎では「戸板返し」と言い、戸板にはりつけられたお岩と小平の幽霊を一人二役の早替わりで見せるケレンである。小平は、幽霊になっても主人への忠臣を忘れず、既成の価値観の中にいる。一方で、既成の価

値観が瓦解したお岩。一人の役者によって対照的な二人の幽霊が瞬時に反転する「戸板返し」も、共鏡のような両義的な役割を担っているのかと考えると、興味深い。

最後に、木ノ下歌舞伎との出逢いを記しておきたい。私が木ノ下歌舞伎を初めて観たのは、2007年の夏に上演された『yotsuya-kaidan』であった。二幕目のみの上演であったが、この時のお岩の「髪梳き」の場がとても怖く、真夏なのに寒気がしたことを今でも鮮烈に覚えている。これまで歌舞伎でも現代劇でも数々の『四谷怪談』を観てきたが、「髪梳き」の場で震えたのは初めての経験であり、それ以来、この劇団に注目してきた。古典作品の現代化という木ノ下歌舞伎の試みは、時にアグレッシブであり、時に古典作品の汲み尽くしえない豊かさの可能性を体感させてくれる。今回は、6時間にも及ぶ通し上演。木ノ下歌舞伎を媒介にして、どのような『四谷怪談』が映し出されるのだろうか。今回、再び新たな『四谷怪談』に出逢えることに期待している。

*1 一日目は、『忠臣蔵』の大序から六段目まで、続いて『四谷怪談』の序幕から三幕目の隠亡堀の場までを上演し、二日目は、隠亡堀の場から始まり、『忠臣蔵』の七段目から十段目、そして『四谷怪談』の四幕目、五幕目を上演し、最後に『忠臣蔵』の十一段目の討入で幕という構成だった。

*2 江戸時代の町人や庶民の生活を題材にした物語を「世話物」と言うが、「生世話」はその中でもよりリアルで写実的な要素が強い。特に南北は、底辺の人々の生活を鋭く描写する「生世話」を確立した。

監修・補綴：木ノ下裕一
演出：杉原邦生
作：鶴屋南北

出演：亀島一徳、黒岩三佳、飯塚克之、細野今日子、田中佑弥、高橋義和、
館光三、田中美希恵、森田真和、日高啓介、後藤剛範、四宮章吾／乗田夏子、
高山のえみ、峯岸のり子、岩谷優志、木山麻彬、竹居正武、森 一生／蘭 妖子

美術：鳥 次郎
照明：中山奈美
音響：齋藤 学
衣装：藤谷香子
立師：坂東橋太郎
補綴助手：稲垣貴俊
演出助手：陶山浩乃
演出部：金城裕磨
大道具製作：株式会社俳優座劇場舞台美術部
照明操作：増田隆芳、平野景子、大竹真由美、有限会社プライト
衣裳製作：秀島史子
運搬：植松ライン
舞台監督：大鹿展明

宣伝美術：天野史朗
文芸：関 亜弓
制作：本郷麻衣

記録写真：田中亚紀
記録映像：桜木美幸

F/Tスタッフ
制作統括：武田知也
制作：高橋マミ
制作補佐：板橋園恵
フロント運営：遠藤いづみ
プログラム・ディレクター：相馬千秋

ユース・アート・マネジメント・プログラム(YAMP)：乾亜沙美、植村 真、
川又美槻、興水すみれ、菅井新菜、塚田佳都、野口 彩、的場久実、三浦彩歌、
山崎 優、山本美幸、吉田由貴

助成：芸術文化振興基金
協力：岩澤哲野、金子澄世、加納豊美、史(chika)、中本章太、オフィス・ラン、
急な坂スタジオ、krei inc.、KUNIO、劇団しようよ、劇団野の上、
劇団民藝、zacco、東宝コスチューム、中野成樹＋フランケンズ、ハイレグタ
ワー、FAIFAI(快快)、FUKAIPRODUCE羽衣、ロコ
製作：木ノ下歌舞伎
共同製作：フェスティバルトーキョー
主催：フェスティバルトーキョー、木ノ下歌舞伎



芸術文化振興基金

Supervision, Revisions: Yuichi Kinoshita
Direction: Kunio Sugihara
Text: Tsuruya Nanboku

Cast: Kazunori Kameshima, Mika Kuroiwa, Katsuyuki Iizuka,
Kyoko Hosono, Yuya Tanaka, Yoshikazu Takahashi, Koza Date,
Mikie Tanaka, Masakazu Morita, Keisuke Hidaka, Takenori Goto,
Shogo Shinomiya, Natsuko Norita, Noemi Takayama,
Noriko Minegishi, Yuushi Iwatani, Yukiaki Kiyama, Masatake Takei,
Issei Mori, Yoko Ran

Stage Design: Jiro Shima
Lighting Design: Nami Nakayama
Sound Design: Manabu Saito
Costumes Design: Kyoko Fujitani
Swordplay Instructor: Kitsutarō Bando
Revisions Assistant: Takatoshi Inagaki
Assistant Direction: Hirono Suyama
Stage Assistant: Yuma Kinjo
Set Production: Haiyuza Theater Co., Ltd.
Lighting Operators: Takayoshi Masuda, Keiko Hirano,
Mayumi Otake, Bright
Costume Production: Fumiko Hideshima
Transportation: Uematsu-Line
Stage Manager: Nobuaki Oshika

Publicity Design: Shiro Amano
Literary Advisor: Ayumi Seki
Production Co-ordination: Mai Hongo

Photography: Aki Tanaka
Video Documentation: Yoshiyuki Sakuragi

F/T Staff
Production Manager: Tomoya Takeda
Production Co-ordination: Mami Takahashi
Production Support: Sonoe Itabashi
Front of House: Izumi Endo
Program Director: Chiaki Soma

Youth Arts Management Program (YAMP): Asami Inui,
Makoto Uemura, Mizuki Kawamata, Sumire Koshimizu,
Niina Sugai, Keito Tsukada, Aya Noguchi, Kumi Matoba, Ayaka Miura,
Yu Yamazaki, Miyuki Yamamoto, Yuki Yoshida

Supported by Japan Arts Fund
In co-operation with Tetsuya Iwasawa, Sumiyo Kaneko, Kano Toyomi,
Chika,
Shota Nakamoto, Office Ran, Steep Slope Studio, krei inc., KUNIO,
Gekidan Shiyuoyu, Gekidan no Ue, Mingei Theatre Company, zacco,
Toho-Costume, Nakano Shigeki + Franksen, Highleg Tower, FAIFAI,
Fukai Produce Hageromo, lolo
Produced by Kinoshita-Kabuki
Co-produced by Festival/Tokyo
Presented by Festival/Tokyo, Kinoshita-Kabuki

フェスティバル/トーキョー組織委員

天児牛大	振付家、演出家
萩田伍	アサヒグループホールディングス株式会社 代表取締役会長 兼 CEO
扇田昭彦	演劇評論家
永井多恵子	公益社団法人国際演劇協会 (ITI/UNESCO) 日本センター会長
樋川幸雄	演出家
野田秀樹	演出家
野村萬	狂言師
福原義春	株式会社資生堂 名誉会長 (50音順)

フェスティバル/トーキョー実行委員会

名誉実行委員長	高野之夫	豊島区長
実行委員長	市村作知雄	NPO法人アートネットワーク・ジャパン 会長
副委員長	吉末弘昌	豊島区文化工部局長
委員	八巻規子	豊島区文化工部局文化デザイン課長
	大沼映雄	公益財団法人としま未来文化財団 常務理事 / 事務局長
	岸正人	公益財団法人としま未来文化財団 部長
	蓮池奈緒子	NPO法人アートネットワーク・ジャパン 理事長
	相馬千秋	NPO法人アートネットワーク・ジャパン プログラム・ディレクター
監事	天貝勝己	豊島区総務部総務課長
法務アドバイザー	福井和幸	北澤尚登 (骨董通り法律事務所)

フェスティバル/トーキョー実行委員会事務局

プログラム・ディレクター	相馬千秋
事務局長	蓮池奈緒子
事務局次長	小島寛大
制作統括	武田知也
制作	河合千佳、喜友名織江、小森あや、 桐山由香、高橋マミ、戸田史子

公募プログラムコーディネーター

メディア戦略・広報	小山ひとみ
メディア戦略・広報アシスタント	松本花音
オープン・プログラム	北沢聡子、田村かのこ
オープン・プログラムアシスタント	藤井さゆり
票券	田野入涼子、後藤天
票券アシスタント	長原理江
チケットセンター	常澤淳、伊指敏
総務	佐々木由美子、佐藤久美子
経理	葦原円花、一色壽好
	堤久美子、青木亮子

技術監督

技術監督アシスタント	寅川英司
照明コーディネーター	河野千鶴
音響コーディネーター	佐々木真真子 (株式会社ファクター) 相川晶 (有限会社サウンドワークス)

アートディレクション+デザイン

ウェブサイト	アジール (佐藤直樹+中澤耕平+菊地昌隆)
パブリシティ	濱田真一+北島謙子+重松信 (株式会社フロフトワーク)
海外広報・翻訳	平昌子、望月章宏
物販	アンドリュース・ウィリアム
編集・執筆	渡辺淳 鈴木理映子

主催：フェスティバル/トーキョー実行委員会

東京都・豊島区・アーツカウンシル東京・東京文化発信プロジェクト室・東京芸術劇場 (公益財団法人東京歴史文化財団)・公益財団法人としま未来文化財団・NPO法人アートネットワーク・ジャパン
共催：公益社団法人国際演劇協会 (ITI/UNESCO) 日本センター
協賛：アサヒビール株式会社、株式会社資生堂、ブルームバーグ エル・ピー
助成：公益財団法人アサヒグループホールディングス芸術文化財団

後援：外務省、公益社団法人日本芸術家連盟団体協議会
特別協力：西武池袋本店、東武百貨店池袋店、東京鉄道株式会社、株式会社サンシャインシティ、チャコト株式会社
協力：東京商工会議所豊島支店、豊島区商店街連合会、豊島区町会連合会、一般社団法人豊島区観光協会、一般社団法人豊島産業協会、公益社団法人豊島法人会、池袋イベント推進協力会、池袋ホテル会
メディアパートナー：ART IT、J-WAVE 81.3 FM、新潟、CINRA.NET、美術手帖
ホテルパートナー：サンシャインシティプリンスホテル、ホテルメトロポリタン、ホテル グランドシティ、サウラホテル池袋
地域パートナー：池袋西口商店街連合会、特定非営利活動法人セファール池袋まちづくり
宣伝協力：株式会社ホステス・ハリス・カンパニー、有限会社ネビュラエクストラサポート (公募プログラム)
会場協力：アサヒ・アートスクエア (公募プログラム)
認定：公益社団法人企業メセナ協議会

平成25年度文化庁地域発・文化芸術創造発信イニシアチブ

【会期】平成25年11月9日(土)～12月8日(日)

ユース・アート・マネジメント・プログラム (YAMP)：石井菜保子、伊集院萌、伊藤安那、伊藤羊子、稲垣美実、乾壺沙美、今井美希、榎村真、大田 久、緒方真由、紙 弘香、川又美樹、栗田知宏、奥水すみれ、崔 瀧、作原飛鳥、佐藤成行、澤田 隆、清水裕花、菅井新菜、田中ゆかり、菅川仁美、塚田佳都、野口 彩、平沢花鈴、嵯 朝美、嶋久美、三浦彩歌、水野美奈、守山真利恵、山崎 倫、山本美幸、吉田恭大、吉田由貴

F/T/ML：青木奈々絵、青木由香、青柳佳代子、阿原乃里子、別荘真由子、館森明香、五十嵐結子、石川世梨、石川拓夫、堀又義雄、今泉友来、岩城春寿、大原尚子、大嶋純子、大津佑子、大村真央、大和田真未、岡本静華、小野寺あす子、小野菜津美、鐘味佳代、片桐根子、加藤真帆、加藤佑麻、金子環夫、川島佳子、桐谷佳美、工藤紫咲、桑島剛史、鷲宮衣子、小平怜奈、五藤 真、後藤真哉、小林淳平、齋藤 利央子、崎濱梨枝、佐藤裕香、佐藤直子、染田 光、清水裕加里、常島楓子、杉崎由佳、鈴木明子、鈴木明子、岡島悠生、平里梨香、平 七海、平高信治、高橋 類、高松童子、蓮川向子、竹之内さやか、竹之内麻子、田中佑、手塚 哲、寺元奈津美、照沼詔尊、戸塚 碧、藤田知子、ドラックサンズ、中村直樹、中村光子、中村優子、中野野斗、西本健吾、平松里子、広田 牧、藤田 輝、藤林まきら〜、ブリット、コナー、古庄美和、堀越時芽子、溝口 凜、村川莉子、村田陽亮、百瀬美帆、矢田沙和子、山口侑紀、山科有良、米谷今日子、四方田錦子、和田幸子、渡邊早紀ほか

発行：フェスティバル/トーキョー実行委員会 〒170-0001 東京都豊島区西巣鴨4-9-1 にしすがも創造舎 NPO法人アートネットワーク・ジャパン内 TEL:03-5961-5202 <http://festival-tokyo.jp/>
編集：鈴木理映子、フェスティバル/トーキョー実行委員会事務局 アートディレクション+デザイン：佐藤直樹+中澤耕平 (ASYL)、小林 剛
※内容は変更になる場合がございます。ご了承ください。

Festival/Tokyo Organization Committee

Ushio Amagatsu	Choreographer, Director
Hiroshi Ogita	Chairman and Representative Director, Chief Executive Officer, Asahi Group Holdings, Ltd.
Akihiko Senda	Theatre critic
Taeko Nagai	Chairman, Japanese Centre of International Theatre Institute (ITI/UNESCO)
Yukio Ninagawa	Director
Hideki Noda	Director
Man Nomura	Kyogen actor
Yoshiharu Fukuohara	Honorary Chairman, Shiseido Co., Ltd

Festival/Tokyo Executive Committee

Honorary President of the Executive Committee: Yukio Takano, Mayor of Toshima City
Chairman of the Executive Committee: Sachio Ichimaru, Arts Network Japan Director
Vice Chairman of the Executive Committee: Masahiro Yoshizue, Director of Culture, Commerce and Industry Division of Toshima City
Committee Members:
Noriko Yamaki, Culture, Commerce and Industry Division, Director of Cultural Design Section
Hideo Onuma, Director of Secretariat of Toshima Future Culture Foundation
Masako Kishi, Executive Manager of Toshima Future Culture Foundation
Naoko Hasuake, Arts Network Japan Representative
Chiaki Soma, Arts Network Japan Program Director
Supervisor: Katsumi Amagai, General Affairs Division, Director of General Affairs Section of Toshima City
Legal Advisors: Kensaku Fukui, Hisato Kitazawa (Kotto Dori Law Office)

Executive Committee Office

Program Director: Chiaki Soma
Administrative Director: Naoko Hasuake
Vice Administrative Director: Hirotomo Kojima
Production Manager: Tomoya Takeda
Production Co-ordinators:
Chika Kawai, Oriie Kyuna, Aya Komori, Yuka Sugiyama, Mami Takahashi, Fumiko Toda
Emerging Artists Program Co-ordination: Hitomi Oyama
Media Strategy: Kanon Matsumoto
Media Strategy Assistants: Satoko Kitazawa, Kanako Tamura
Open Program: Sayuri Fujii
Open Program Assistants: Suzuki Tanoiri, Takashi Ogo
Ticket Administration: Rie Nagahara
Ticket Administration Assistants: Nagisa Sugahara, Jyomyong Yoon
Ticket Center: Yumiko Sasaki, Kumiko Sato
Administrators: Madoka Ashihara, Hisayoshi Ishishi
Accounting: Kumiko Tsutsumi, Ryoko Aoki

Technical Director: Eiji Torakawa

Assistant Technical Director: Chizuru Kuno
Lighting Co-ordination: Makiko Sasaki (Factor Co., Ltd.)
Sound Co-ordination: Akira Aikawa (Sound Weeds Inc.)

Art Direction + Design: Asy! (Naoki Sato + Kohel Nakazawa + Masataka Kikuchi)

Website: Shinichi Hamada + Satoko Kitajima + Yu Shigematsu (offwork Inc.)
Public Relations: Masako Arita, Akhiro Mochizuki
Overseas Public Relations, Translation: William Andrews
Merchandise: Jun Watanabe
Editor/Writer: Rieko Suzuki

Organized by Festival/Tokyo Executive Committee

Tokyo Metropolitan Government, Toshima City, Arts Council Tokyo & Tokyo Culture Creation Project & Tokyo Metropolitan Theatre (Tokyo Metropolitan Association for History and Culture), Toshima Future Culture Foundation, NPO Arts Network Japan (NPO-ANJ)

Produced in association with Japanese Centre of International Theatre Institute (ITI/UNESCO)

Sponsored by Asahi Breweries, Ltd., Shiseido Co., Ltd., Bloomberg L.P.

Supported by Asahi Group Arts Foundation

Endorsed by Ministry of Foreign Affairs, GEDANKYO

Special co-operation from SEIBU IBEKUKUROHONTEN, TOBU DEPARTMENT STORE IBEKUKURO,

TOBU RAILWAY CO., Ltd., Sunshine City Corporation, Caccott Co., Ltd.

In co-operation with the Tokyo Chamber of Commerce and Industry Toshima, Toshima City Shopping Street Federation, Toshima City Federation, Toshima City Tourism Association, Toshima Industry Association, Toshima Corporation Association, Ikebukuro Inbound Association, Ikebukuro Hotel Association
Media Partners: ART IT, J-WAVE 81.3 FM, SHINKO, CINRA.NET, Bljitsu Tacho
Hotel Partners: Sunshine City Prince Hotel, Hotel Metropolitan Tokyo, Hotel Grand City, Sakura Hotel Ikebukuro

Regional Partners: Ikebukuro Nishiguchi Shopping Street Federation, NPO Zephyr

PR Support: Poster Haru's Company, Nevula Extra Support Co., Ltd. (for F/T Emerging Artists Program)

Venue Co-operation: Asahi Art Square (F/T Emerging Artists Program)

Approved by Association for Corporate Support of the Arts

Supported by the Agency for Cultural Affairs Government of Japan in the fiscal 2013